



学校法人
鎌倉女子大学

女子大学－女子会論

これは、私のやや印象に近い、あるいは思い込みに類するような感じもするものですから、このような場所でお話ししていいものかどうか、ちょっと迷いもするのですが、しかし最近時々目にし、耳にするので、何となく気になるものですから、話題にしてみようかと思ったわけです。「女子会」という言葉です。「男子会」という言葉は、あまり聞いたことがない。

イギリス辺りには、女人禁制のメンバーズクラブなどがあって、昔マーガレット・サッチャーさんが首相時代入りたがったことがあったけれど、遂に入会は許されなかったといったような記事を読んだことがありました。「鉄の女」と呼ばれたサッチャーさんの面目躍如たる逸話ですが、それは兎も角、日本では、「男子会」は聞きませんが、「女子会」は、年齢層に関わりなく、またどこであっても、それが高校生のサークルでも、会社の飲み会でも、中高年のテニスクラブでも、あるいは介護老人ホームでも、楽しく催され、女子の方々は老若皆、楽しそうに和気藹々元気がいいわけです。先日、出張先のホテルのエレベーターに、「女子会の理想を叶えます 一気兼ねなく話せる友人たちとのイタリアン・ランチ」という広告が貼ってありました。どうも、男は女性を入れて盛り上がり、女性は男を排除して盛り上がる、そんな気さえするわけです。

よくいわれることですが、年老いて妻に先立たれると、夫はもう力が抜けて、パタパタと自分もダメになっていってしまう。これに対して、夫を亡くした後、大丈夫かなと思っている夫人でも、意外と、というよりも却って元気になり、人生のギアチェンジをして、サークルだ、旅行だ、市民講座だと、楽しそうにエンジョイしているわけです。ちょっと面白い現象だなと思うんですね。かつて、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、女性を「第二の性」などといって、かなりコンプレックスに満ちた議論を展開したことがありますが、もっとも時代が時代だったという言い方も出来るのでしょうか。しかし、女性論を社会的文脈だけで考えるのは、実はあまり稔りをもたらす議論とは思えず、女性の力、可能性ということに着目していくと、本当に自立的なのは、いざとなると女性なのではないかとさえ思えるわけです。

女性として勇躍生きようとした与謝野晶子が女性の依頼主義・寄生主義を嫌悪したように、昔から女性は、夫に養ってもらうのだから、自立的に生きられないといったような文脈で語られがちなところがあるものですが、しかし本当にそうであるのか。むしろ、女性を入れて盛り上がる、伴侶を亡くすと力を無くす、場合によると亭主閑白などという心理及び振る舞いは、よく振り返ってみると、典型的な女性依存症の裏返しと見えなくもありません。

確かに、女性は、同性同士で行動すると、一層力が発揮されるようなんですね。大竹文雄さんという経済学者の方が『競争と公平感 ―市場経済の本当のメリット』という本の中で興味深い実験結果を紹介していました。私も面白いと思ったので、調べてみたのですが、それは、オーストラリア国立大学の教授グループがやったという実験でして、「The Role of Single-Sex Education (男女別学の教育の役割)」という副題のついた「Gender Differences in Competition (競争における性差)」や、「Do Single-Sex Environments Affect their Development? (男女別環境は彼等の発達に影響を及ぼすのか?)」という副題のついた「Gender Differences in Risk Aversion (性差によってリスクを嫌うことの違い)」という報告書として発表されているものなのです。

これによれば、要するに同性同士で構成される学校での女子の行動の仕方と、異性混合で構成される学校での女子の行動の仕方を比較してみると、女子校の女子は、共学の女子よりも競争的成果を選ぶ傾向がある、つまり特に女性の場合、同性間の競争の方が切磋琢磨する度合いが高いということなのです。共学では、どうしても性別役割分担の意識から、お互いに遠慮がちになるのかも知れませんね。ということは、女子大学のような同性同士で構成される社会を人為的に仮構し、その中での切磋琢磨を図らせた方が、通常の実社会で生活する人たちとはまた違った能力の開発に資することになるのではないかと想像されるわけです。とすると、女子大学に学ぶ人たちは、共学大学に学ぶ人たちよりも、複合的な社会経験、つまりは文化経験をしていることになるのではないのでしょうか。こうしてみると、あながち私の「女子大学―女子会論」も、そう突飛な印象とばかりいえないようにも思えてくるわけです。

[>前のページへ戻る](#)